

---

# 「雨の中」

並木沙知子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「雨の中」

### 【Nコード】

N4783J

### 【作者名】

並木沙知子

### 【あらすじ】

とある女の子が、同級生をはさみで刺し殺した。

その後、雨の中歩いて現場から遠ざかる中での心境。

ああ、雨の滴が気持ちいい。

このまま、ずっとこうしていらればいいのに。

でも、きっとそれはできないだろう。

人間の私は、このままこうしているときつと風邪を引く。

それか、肺炎にでもなってしまうだろうから。

一人の少女は、一時間程大雨の中独りで立ちつくしていた。

「  
」

あれ。

聞こえないはずの声が聞こえる。

おかしいな。

何で聞こえるんだろう。

風邪を引く前に、気が狂ったのかな。

それとも、ただの幻聴なのかな。

「  
」

なんだ、記憶の中の声か。

無意識に引き出した昔の記憶が、再現されようとしてるのか。

「  
」

優しく私を呼ぶ声はもう聞こえない。

あれ。

目の前にある自分の手が、血に染まってる…

本音で話した記憶が、まずない。

それは友達との場面でも親との場面でも絶対になかったもの。小学生の時からか。

本音を人に話すことを嫌悪するようになったのは事実だ。

本音を話すのが怖かった。

周りの人たちが中傷してきそうで。  
だから仮面をかぶることを覚えた。  
だって、見破られたくなかったから。

にこにここと張り付いた仮面。

それはなかなか取れるものじゃなくて。  
友達が一人でもいるとき、私の仮面ははがれることはなかった。

嘘を貫き通すために吐く嘘なんて厭わない。

嘘を吐くことに理由なんていらない。

理由なんてあっちゃ、いけないんだ…

にこにこ。にこにこ。

「人形みたい」

そういわれたこともある。

笑ってるだけの人形。笑い顔から泣き顔を作れない人形。

「気味が悪い」

私にとって、これよりも気味が悪いのは集団の中ですから。  
あなたの方が私にとって数倍気味悪いですけど、何か。

「大丈夫？」

心配そうに顔をのぞき込んだのは由美子だった。

小学5年生の幼顔が私を下からのぞき込んで、私に一瞬でも素の笑顔  
顔を灯させた。

今の私の唯一の“親友”、そう呼べる存在。

由美子は優しいから。

だから切り捨てられない。その優しさに一瞬でも助けられたことが  
ないとは言い切れないから。

“親友”だよ。

でも、由美子は私の本性を知らない。

知らせるつもりもなかったし、知らせちゃいけない気もしたし。  
だから、私は知らせないようにした。

…知ったとき、きつと由美子は私と距離を置くだろうから。

つまらない塾の授業。

会話のない食事。

眠れない夜。

その中に少し組み込まれた“子供らしい会話”。

まあ、楽しかった。

子供らしくいるのも疲れるけど。

でも大切だった。それは事実。

でもなんでだろうな。

私は大切なものほど失いやすい質らしい…  
質らしい…

「志織…っ！」

怯える視線が、私を突き刺す。…痛い。

「由美子…どうしたの？」

フラッシュバックした記憶が頭の中で流れる。

嫌だ嫌だ嫌だ…！

“由美子は志織のこと嫌いなんだって。それに一番悪口言うこと多いよね”

体育で怪我した由美子より先についた教室の、滅多に話さないクラスメートの会話。

ミーハーなクラスメートと根暗な私。

どう考えても性格が合うはずもなく、すれ違うたび睨むあの視線が嫌いだった。

“志織って馬鹿だよね！勉強はできるけどさー…”

“そーそー！いい加減気づけよって感じ！”

生まれて初めて、カツとなった。

もう何も考えられない。考えたくもない。

教室には入らなかった。

踵を返して、向かったのは -

「…志織、」

保健室特有の臭いが鼻を刺激する。

腕に包帯を巻いた由美子が目に入る。

「どうしたの？…何で戻ってきたの？」

いつも通りの口調。

それがなおさら白々しい感じがした。

いつも結構気に入っていたあの優しい物言いが。  
今は、憎む材料にしかない。

目の前に、切れ味の良さそうなのはさが目に入る。

咄嗟に手に握る。由美子を見る。

「ねえ、あたしのこと嫌ってたんでしょ？」

「…何、言ってるの？そんなわけ…」

「“そんなわけない”って？…冗談も程々にしなさいよ。」

はさを振り上げる。

由美子が小さな悲鳴を上げる。

「…きゃっ！」

高いソプラノの声が。

耳に響いてむかつく。

どうしてそんなに高い声なの？

どうしてあんな奴らと話せたの？

そう思った瞬間、頭の片隅で解った。

私はきつと由美子に嫉妬してたのかな。

「ね、答えてよ。」

一歩ずつ確実に歩み寄る。

背に壁が当たり、それ以上後退できない由美子を見て私は一度鼻で笑った。

「こうやって、私を嘲笑っていたんでしょ？」

由美子の目に、怒りが浮かんだ。ような気がした。  
初めて見る表情。

目には涙がたまっていた。

「えーそうよ！何が悪いの！？志織だって私に一度も本音なんて話さなかったくせに。」

開き直った由美子の表情を私はもう見れなかった。

はさみを振り上げる。  
突き刺す。

手が赤く染まった。由美子の包帯も赤く染まる。

白黒の、何の変哲もない私の世界。  
それは、これから変わらず訪れ続けるはずだったのに。  
私が突き刺したその瞬間…

セカイが赤く染まりました。



雨の中、取れない赤を私は纏って歩き続ける。  
怖いけど、これ以上進みたくないけど。

もう一度思い返した記憶の中で、気づいてしまったから。  
私は取り返しもつかない罪を犯してしまったことに…

「由美子…」

ごめん、と言おうとした瞬間。

響くサイレンの音に怯え、走り出した。

雨粒を感じたくて脱いだ靴下と革靴のせいで直に感じる公園の地面  
のぬかるみ具合が気持ち悪い。

そう思った瞬間、私は転んだ。

ピタン！

そんな効果音が似合いそうなほど、派手に。

体中の感覚が戻ってくる。

体が氷のように冷たい。

それに、転んで付いた傷が痛くて。

全てが嫌になる。

普段より荒いかもしれない呼吸を繰り返し、苦しいことに気がつく。  
息を吐き出す度、肺が悲鳴を上げる。

意識がゆっくりと暗転して。

暗闇の中感じた痛みと寒さと苦しさは。

一生、私の中からは消えることがないのだろう。

それ程、鮮明に私の記憶には刻まれていく気がして。

そのまま、私は意識を手放した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4783j/>

---

「雨の中」

2010年10月18日12時20分発行